

関東大学女子一部バレーボールチームにおける

指導者－選手間の関係性がチームワークに及ぼす影響について

生涯スポーツゼミナール 1316059 本郷 真理

1. 研究動機・研究目的

近年日本国内において、アマチュアスポーツ界の不祥事が立て続けに起きている。特に、世間を騒がせている“大学スポーツ”での問題は日大アメフト部の悪質タックル事件から始まり、チアリーディング部のパワハラ問題、志学館大学レスリング部のパワハラ問題など、日本スポーツ界のいい加減さを生み出す根源とも言うこともできる。このような大学スポーツでの問題のほとんどが、「指導者と選手」という関係の中で生じ、それぞれの部活内では解決できないものになっていることは言うまでもない。そんな中、私が所属する部活内でも同じような問題が起きてしまった。今までは他大学や別の部活で問題が起こっていたことからどこか他人事のように思っていたが、実際に問題の当事者となったことで、これらの問題はなぜ、どのようにして起こるのか考えるようになった。現在、日本では今年のラグビーワールドカップや来年の東京オリンピック・パラリンピックの開催が間近に迫り、今までにない“スポーツブーム”となっている。人気と共に不祥事にまで注目が集まり、ファンやメディアの目も厳しくなることは仕方のないことかもしれないが、そんな今こそ、日本のスポーツ界やスポーツを行う上での古い考えや在り方を取り払い、新しく生まれ変わることのできるのではないかと考える。また、私が大学四年間の部活動を通じて一番感じたことは「チームワーク」の重要性である。日本一という目標を掲げ毎日の部活動を行ってきた私にとって、チームワークは勝敗をも左右するとても重要な要素だと考えるようになった。「チームワーク」を選手一人一人がどのように捉え、作り上げていくべきなのか。また、指導者とどのように関わり、チームワークを高めていくことが効果的か。この研究が今後の大学生アスリートの指針となればいいと思った。さらに、これらの問題において共通している点は、指導者－選手間でのコミュニケーションが円滑でないことだと言える。これを機に、指導者－選手間で起こる問題のもととなる原因を突き止め、指導者はチームワーク向上のために選手やチームにどのように関わっていくべきかを調査し、今後の大学スポーツのよりよいチーム作りに役立てたい。

2. 研究方法

本研究では、関東大学バレーボール女子1部リーグに所属する12チーム(青山学院大学、日本女子体育大学、松蔭大学、嘉悦大学、大東文化大学、日本体育大学、東京女子体育大学、東海大学、日本大学、筑波大学、順天堂大学)を対象として、チームの学生へアンケート調査を実施した。調査期間は令和元年11月6日から11月20日までの14日間にかけてであり、調査にはGoogleフォームを活用した。アンケートは12チームに依頼し、そのうち回答して頂けたのは9チームだった。また、最終的な回答人数は184となった。

本調査では、先行研究である梅崎(2010)のサッカー指導における「指導者－選手」のコミ

コミュニケーションの相互比較や、三沢良(2019)のチームワークとその向上方策の概念整理のアンケート調査を参考にして、筆者が独自に設けた項目計 16 項目によって測定している。

3. 主な結果と考察

指導者とのコミュニケーション頻度に関しては、「週 3」でコミュニケーションをとっていると回答した人 57 人の 31.0%と一番多く、「毎日」と回答した人が 48 人の 26.1%と二番目に多いことがわかった。これは、「週 3」以上コミュニケーションをとっている人の割合が全体の 57%以上になり非常に高い結果となった。筆者の経験では、下級生の頃などは指導者とのコミュニケーションを意識して活動をしている人が少なかったため 1 部所属チームの指導者とのコミュニケーションを取ろうという意識が高いことがわかる。指導者自身が学年や立場など関係なく選手と積極的にコミュニケーションを取ろうとする姿勢が伺える。今後、指導者を対象とした選手とのコミュニケーションにおける調査がさらに必要になると考えられる。また、「全くない」と回答した人は 6 人の 3.3%と一番少なく、「ほとんどない」と回答した人は 30 人の 16.3%と 2 番目に少ないことがわかった。「ほとんどない」「全くない」と答えた人は全体の約 20%ととても少ない結果となった。筆者のチームでは、下級生や指導者の練習参加時間を考えると指導者とのコミュニケーション頻度が関東一部リーグの中では劣っていることがわかった。

4. 結論

調査をおえて、予想とは多少違う部分があった。関東大学バレーボール女子 1 部リーグにおいては、指導者－選手間のコミュニケーションがとても活発に図られていることがわかったのである。選手自身やチームが指導者と比較的良好な関係が築けており、それによって指導者がチームワークに良い影響を及ぼしていることが明らかとなった。しかしながら、指導者と良好な関係を築けていたとしても、「指導者に求めること」を問う調査でわかるように、「選手を平等に扱ってほしい」や「選手一人一人に合わせた声かけをしてほしい」など選手一人一人を大切に尊重してほしいような意見が多くみられた。バレーボールはチームスポーツであるため良くも悪くも人と比較されやすい環境にある。したがって選手は、指導者からの他人との接し方の違いを察知しやすい環境にある。こうした、選手一人一人の気持ちに寄り添う指導が求められると考えられる。

5. 卒業論文の執筆を終えて

本研究を進めるにあたり、担当教員の黒須先生を始め、ゼミ員、大学院生の方々には、大変お世話になりました。また、調査に協力して頂いた方がいたからこそ、新たな気づきを得ることができ、様々な考察をすることができました。深く感謝申し上げます。本論文の執筆にご協力、ご指導、ご鞭撻いただいた多くの方々に改めて感謝の意を表させていただきます。本当にありがとうございます。